

# リオデジャネイロ五輪目前 名選手・名監督にボクシングを聞く



## 成松 大介

リオ五輪ライト級代表  
熊本農業高校 出身

——成松選手はケガが多いと語って来ましたが今はいかがですか。

「問題ありません。右肩が少し痛みますが、練習にも支障のないケアをできています。ただ、体のダメージは蓄積しているので、大会前にもうひとつ国際大会に出たいなどの気持ちはないですね」

——本戦ではどんな戦法を想定していますか。

「初回は相手の体力をいかに減らせるか。握りづらいグローブですぐにダメージを与えるには、必然的に狙いが腹になります。だから左右どちらのボディブローも強く押し込めるようにしたいです。初回は採点よりも体力消耗を重視しますが、採点

では初回で実力を判断され、中盤以降にもこの印象が影響している場合が多い。だから初回を捨てることまではできません」

——メダルを獲るための壁は？

「実力的にラサロ・アルバレス（キューバ）とロブソン・コンセイソン（ブラジル）が抜きん出ています。2007年世界選手権の決勝でワシル・ロマチェンコ（ウクライナ）に勝ったアルバート・セリモフ（ロシア→アゼルバイジャン）も復調して、去年の世界選手権では準優勝していますが、かみ合い自体は悪くないと思います」

——かみ合いが悪いとすると、主に懐の深いオーソドックスでしょうか。

「そうですがこのタイプこそ腹です。前の手を大きく構えた状態から亀のように丸めさせれば、かみ合いかたが変わってきます。そう導くために、まずは体のどこかにパンチを当てたいですね」

——基準が曖昧で割れることの多い採点とどう向き合っていますか。

「実力を100%出せたかどうかというところに意識を合わせるべきだと思っています。自分の実力を出せずに負けるということだけは避けます」

——いつから五輪を意識していましたか？

「大学3年のときに全日本選手権で優勝した時です。ロンドン五輪予選で負けた時にこの気持ちがはっきりしました」

——当時はロマチェンコのスタイルを模倣していました。

「うまく真似できませんでしたが、ロマチェンコがプロに行った今も参考にはしています。戦うことを想定した場合に、接近戦でどこが一番自分が劣るのかというのを考えたこともありました。体

の強さか、技術か…」

——リオ五輪ではロマチェンコが前回制したライト級で出場します。

「僕はこの競技の競技者なので五輪がこの地上で最大の祭典で、ここで金メダルを取ることが真の世界一だと思っています。プロと比較しているわけではありませんし、競技性が大きく異なりますから比べる必要もない。そう思っていたら、今回は最終予選にプロボクサーも出ました。五輪のルールでプロと戦うというのは例がなかったので注意しておきたいですね。いつも通りのことをやるのが、何より経験を活かすことになると思います」

——プロと五輪、ふたつのボクシングで特にどこが違うと思いますか。

「似ていて勝手が色々違いますね。まず、自分の体脂肪は試合期間で3%くらい。プロは長丁場なので、もっと必要だと思います。毎日行われるトーナメント制で当日に計量。グローブもバンデージも違って、ユニフォームもあります。攻防のテンポが速い。全日本選手権なら4日連続で試合。毎日計量となるとあまり体重を増やせません」

——練習は「ミット打ちをほとんどしないでバッグを打ちまくる」のが成松式だと伺いましたが、食事はどんな調整をしていますか？

「汁ご飯をたくさん食べること、野菜を食べないこと。試合前は必ずこれを食べるみたいなこだわりを意図的に作らないようにしています。現地で手に入らない食材かもしれませんし、宿舎のメニューも事前には分かりません。ただ、炭水化物はどこに行ってもあります。それと、国際大会では試合の翌日に1日空くことが多いので、勝ったらひとまず2キロほど太って、翌日にこの2キロを落としています」

——リオ五輪に行けなかったら引退して自衛官になるつもりだったと語っていました。

「今は五輪の道が開けました、ここでベストパフォーマンスをすることに努めます。それ以降はひとまず白紙ですね。今回がラストファイトかは決めていません」



## 森坂 嵐

リオ五輪バンタム級代表  
奈良朱雀高校 出身

——五輪予選通過の感想からお願いします。

「最高にうれしかった。「言葉にできない」とか“夢のよう”という感情はこれかと思いました。目標を聞かれたら、リオ五輪と言ってきましたが、ハタチになったばかりですので、現実的なのは4年後の東京五輪だと思っていました」

——外国での試合には慣れましたか？

「はい、国際大会は基本的に外国開催ですので。ただ、減量のキツイ自分にとって今回はスケジュール的な不運がありました。健診のあとに4日ほど試合がなくて、そのあとに4日連続で試合。この偏りで体を休めることができなかったんです。もっと知識を増やせば、練習で動きながら体重を落とせるかも知れないので、リオ五輪が終わったら減量方法から勉強し直したいと思います」

——森坂選手の持ち味はブレないこと。若手の選手では非凡な域ですが、初回の劣勢を2回から修復する柔軟性にも長けています。

「何度か相手のストレートをもらったら、距離を

少しズラす微調整は、ボクシングを始めたクローバーボクシングジムの段村信幸トレーナーから、足の動きを丁寧に習った成果です。段村トレーナーからは体幹の強化も徹底されたので、それがブレないことにもつながっているかもしれないです——ブレないことが裏目に出るとすれば、まとまり過ぎていて、伸びしろに一つの疑問があります。「自分では、まとまっているというより、未熟でほかのことができないほど必死という感覚なんです。リードでさし負けるとすぐ焦ってしまう。だから世界予選では 100%の一生懸命ではなく、要所で力を抜くことを意識しました」——技術のルーツを教えてください。

「根本的な基礎は中学時代にクローバーボクシングジムで佐藤征治会長から学んで、高校進学後もジムの段村トレーナーから指導を受けていました。高校のボクシング部でロス五輪代表の高見公明先生と同時進行で習っていると、教えに食い違いが出てきます。そのときに両方を学んで自分の考えで選択していくと、自身の思考力や感覚を磨くこともできました。これは双方の恩師の意向でもありました」

——では技術は主に段村式ですか？

「今は高見式です。前の手のロシアンフックを習ったことで、長距離戦の攻撃に幅が広がり、むやみに攻めていなくても、相手のバランスが崩れたところを狙えるようになりました。それと中学時代、1500メートル走で近畿8位まで行きましたが、この基礎持久力も高見先生が重要視した走り込みで高められていると思います」

——五輪にはどんな対策を練っていきますか。

「東京農業大学の山本浩二監督からスパーの相手には、井上尚弥・拓真兄弟にお願いしていると伺っています。五輪本戦は格上ばかりなので、気負わずに自分のボクシングをやりきりたい。メダルを持ち帰りたいのはもちろんですが、最低限、4年後の五輪への自信を持って帰りたいと思います」



## 今岡 紀行氏

山陽高校ボクシング部監督  
広陵高校 出身

「自己正当化するわけではありませんが、私の学生時代が特にヤンチャだったわけではなく、我々の世代自体が今よりヤンチャでした。近所の中学校同士で喧嘩が絶えないという話も当時は珍しくなかったもので。まあ時効だと信じて……高校では入学前に入試から大乱闘でした（苦笑）。

そんな性格でしたからボクシングも最初は“ど突き合い”だとばかり思って取り組んだはずですが。それが2年生で出たインターハイからスポーツだと思えるようになった。あの価値観の変化を体験してきたからこそ、教え子にはインターハイを経験してほしいと常々思っています。

“ど突き合い”とスポーツの融合を高次元で感じたのは高3のインターハイです。反対ブロックで倒しまくって勝ち上がった渡辺雄二（沼津学園高校）を決勝で倒しました。雄二がその後にプロのスター選手になったこともあって、いまだにイン

ターハイ史に残る名勝負として関係者に挙げていただくのは光栄ですが、本音をいえば彼よりも優勝自体に必死でした。成長期と重なって減量苦でしたし、強い選手が他にも結構多かったです。雄二とは何年も会っていませんが電話は時々かけ合います。今、駿台学園高校から法政大学に進んだ高山涼深選手は雄二の甥だそうですね。まったく知りませんでした。

法政大学時代は部活のあとにプロの名門である帝拳ジムにも通っていました。少なくとも当時のアマ選手には“強いからこそあえてプロに行かない”という美学があったんです。そこに帝拳さんは無理強いをして来ない。だからいまだに関係を持ち続けられます。それと、部活のあとにジムでも練習しているとオーバーワークになるところがあります。調子が悪いと思って練習すればするほど空回りしていく。それを大場政夫さんを育てた桑田勇トレーナーから“休むのも練習だ！”といわれてハッと目が覚めました。こうした客観的な意見は指導者の重要な役割だと思っています。

国際大会にもよく出ささせていただきましたが、最も記憶に残っているのはベルリン国際トーナメントです。1989年に初めて行った当時のベルリンは東ドイツ。冷戦で引かれた国境の向こうからは西ドイツの人間が楽しそうに手を振っていて、国境の壁に近づこうものなら銃撃戦も辞さない東ドイツ側と駆け引きをしていました。大会では1回戦でオルズベック・ナザロフ（ソ連）にポイント負けでした。日本のプロボクシング界でも相手をバタバタと倒しまくった左ボディブローは確かに強烈で、これを日本に帰って模倣したら、確かに倒せることがよくありました。2度目は現地入りしたその日に東西ドイツが統一したんです。試合よりむしろ開催地そのものが白熱していました。平壤国際トーナメントで北朝鮮にも行きました。大会後の観光が断崖絶壁の登山だったのは印象的で、朝鮮高校の先生方には“あの山を登ったんですか！”とよく驚かれます。

選手活動は国体の10年連続出場を節目にピリオドを打とうと決めました。そのあと、何年ぶりか

に家族旅行を兼ねて社会人選手権にライトミドル級で出たことがあります。結果は準優勝。決勝で負かされた石田順裕君は好青年で“これで自信を持ってプロに行きます！”と挨拶され、私も“頑張ってるな”と見送りました。

現在勤めている中電工業株式会社は1994年に行われた広島アジア競技大会が縁で入りました。海外遠征や卒論で就職活動をできなかったとき、この大会の代表として戻ってきてほしいと言われました。その時に就職先として用意していただいたのがこの会社だったんです。

途中から山陽高校でボクシング部の監督を任されることになりましたが、当初は廃部寸前で部員がゼロ。そこに前田昌彦らが入ってきて、やる気があった。このやる気が私の取り入れたかった指導の工夫と相乗効果を生んだと思います。例えば私はウォーミングアップで長時間のハイテンポなミット打ちを行います。これは私が試合後に調子がよくなった経験や、旧共産圏のウォーミングアップを観察して練った方法です。体力がつくとそれに見合っただけでアップ内容が変わってくると思うんです。前田はロンドン五輪で表彰台入りした村田諒太君（南京都高校）や清水聡君（関西高校）の活躍した学年で、高2年の国体では決勝で栗生隆寛君（習志野高校）に負けました。1ラウンド目に拳を折ってしまいましたが、翌年のインターハイでは星大二郎君（兵庫工業高校）に勝って優勝し、国体では川内将嗣君（龍谷高校）に負けて準優勝でした。

学生時代から教えることというより、練習を工夫するのが好きでした。その最初の工夫だったのは2歳下の弟・賢覚の指導です。私がボクシングを始めたときに強いスパーリングパートナーが欲しくて弟にボクシングを教えました。スパーリングを大学まで行っていましたが、結局いつもお互いどこかで遠慮していましたね。少しずつ手加減の具合が変わってきて、弟が全国大会で優勝した時は本当に嬉しかったです。

ボクシングを通じて多くの人と出逢い、様々な経験をできました。個人競技ですがチームワーク。

仲間に恵まれたせい、私自身、ボクシングを辞めようと思ったことは一度もありませんでした。あとは”ど突き合い”で負けたくないという意地ですかね（笑）。

そういえば、今の子に喧嘩をしたことがあるのか聞いたら“ない”とよく答えられます。なるほど、話し合いで解決しているんだなど見習いました（笑）」



## 木庭 浩介 氏

花咲徳栄高校・平成国際大学監督  
九州学院高校 出身

「昨年度版でご紹介いただいた九州学院ボクシング部顧問の兄・浩一と同様、私も小1から高3まで柔道を志して、日本一にもなりました。兄と同学年にはあの有名な山下泰裕先輩（ロス五輪・無差別級金メダリスト）までいたくらいですから、のちに世界のトップを争う選手も近隣の学校で多

くひしめき合う充実度の高い環境だったんです。しかし兄がボクシングを始めると、私に“ちょっとパンチを打ってこい”と頼んでくるのが日常から出てきました。私がボクシングに初めて触れたときです。兄が活躍すると、私にも誘いがかかり始めます。ボクシングは柔道と同じ五輪競技という意味でも興味を持ちました。柔道で右足を前に構えていたので、サウスポー構えで戦いに臨みましたが、ボクシングの経験は浅いですから、馬力資本のブルファイターで戦うことになります。そんななか、柔道で相手の袖をつかむ右手をフックに应用すると、力強いパンチになるなど、共通点を見いだせるようになり、前年度の九州王者から4度のダウンを奪ってまずは勝てました。それで、柔道の白石礼介監督から、“柔道と開催期間が重ならなければボクシングの試合にも出ていい”と特例を頂いたんです。インターハイ予選はボクシングと柔道の期間が重なりましたが、ここでボクシングを選んだことが、その後の私に大きく影響したと思います。

インターハイではライトミドル級で3位。柔道では名門大学に学費免除で進学が決まっていたが、気がかりは足のケガでした。得意だった大内刈りで足の靭帯をよく痛め、治っては痛めの繰り返し。ボクシングならここまで足に負担がないと思い、考えた末に、兄のいた日本大学ボクシング部を選びました。

入部後にオーソドックス構えに変えることになりましたが、不慣れであることに焦って強振を繰り返していたら結局、右手の骨折などを繰り返してしまいました。一方で、柔道で切磋琢磨していたライバルたちがロス五輪やソウル五輪でメダルを獲得。ボクシングが熟考できるようになったのは、こうした葛藤後に主将の任務を終え、指導者になってからだと思います。

花咲徳栄高校では最初に柔道部を任されましたが、すでに県内にも厚い層のある柔道より、フロンティア精神を燃えさせるボクシングの指導を望み、この33年で30人の全国王者を輩出しています。あと一歩で全国制覇を逃しましたが、近年の

日本プロボクシング界でエース格だった内山高志も高校のOBです。

指導ではセオリーも大切ですが、自分の経験を踏まえ、個人の精神面や体格などを考慮したアイデアも多く取り込んでいます。私自身、オーソドックス構えにしたら右ストレートを打つときに感情をセーブできなくなりがちでしたが、左に構えれば、利き手ではない左のストレートに冷静になりました。私は各自のセンスを大切に考えながら多くの選手にサウスボースタイルにシフトすることを勧めています。キャリアの初期であれば、利き目と利き手が前にあるほうが安心感を持てる利点もありますね。18年前に、佐藤栄太郎学園理事長からの提案で“大学にもボクシング部を創ってほしい”と頼まれ兼任を決めました。

女子の指導も長いですが、きっかけは矢代家康OBと弟の義光OBの妹である由希が入ってきたことです。以前は柔道界でも女子の文化が乏しかったのですが、“柔ちゃんブーム”で変わったのを見ていましたし、レスリングでも同じような流れがあったので、ボクシングでもこの順番が来ることを予測できたんです。平成国際大学の卒業生7人が在学中に全員、全日本王者になっています。

近年では釘宮智子のように女子が主将を務めることもありました。“女子部員を入れると男子の成績が落ちる”という傾向があるそうですが、それを抑止する方法もあります。能力さえあれば女子主将も問題ないと信じていました。4年生がいても3年生を主将にしたこともあります。能力のある人間が主将になれば、学年としての上下関係とは別で、この人の言うことを聞こうと思えるんです。部訓は兄弟ともに“恐れず、驕らず、侮らず”。教え子たちには、人を大切にし、人生のチャンピオンであれと指導しています」



## 熊本 道之氏

元・関西高校ボクシング部監督  
同校 出身

「いとこの見よう見まねでサンドバッグを叩き始めたのは小1の頃ですが、ボクシングを始めたのは関西高校に入ってからです。インターハイはフライ級でベスト16。進学した当時の駒澤大学は、2部リーグの最下位争いをしていましたが、卒業後にプロで世界王者になる中島成雄先輩がいたんです。当時の試合は8オンスでしたが、先輩と14オンスで毎日するスパークのほうが痛くて、8オンスで試合をするのが怖くなりました。ただ、スパークをしたくないことはまったくありませんでした。この人にパンチを当てることができればきっと他の強豪選手にも当てることができると感じんですね。位置を少しズラすことで状況を変えるのが巧く、スピードもあったので、最初の3か月は1発も当てられませんでした。ただ、3年と4年のときに全日本選手権の決勝まで行けたのは、当時の駒大では私が初です。ささやかですが、中島先輩の準決勝進出を超えて恩返しできました。

壁だと感じていたのは日本史上初めて世界選手権の表彰台入りをはたした石井幸喜さんでした。常に動いていて1発当てると何発も返ってくる。レフェリーが試合を遮断すると、すぐに構え直して待っていましたね。それで、“ボックス！”の瞬間にこっちに踏み込んでくるのに大きな威圧感がありました。計3度戦いましたが、石井さんはハイテンポな攻防をマスターした私にとってのザ・アマチュアでした。

社会人で1年続けて選手引退後、関西高校では仕事の合間に指導をしていましたが、部員の不祥事で1度廃部に。それから校長に半年間頼み込んで復活させてからは、私が顧問になりました。それが1981年で廊下で教え始めました。他校から来て教えていた三谷大和が1988年にインターハイで優勝。部員でも翌年に植村浩一が優勝しました。植村が引退後に教えた三垣龍二ものに国体王者になり、岡田隆志は駒大進学後に大学初の全日本王者になりました。

そして、ロンドン五輪・バンタム級銅メダリストの清水聡もここでボクシングを始めた一人です。清水は178センチの高身長ながら、54キロで戦っていました。私の経験則からしてまったく問題なかった。細かったですからね。主な指導方針は“高身長を活かせ”です。足幅を広げて身長差を埋めてしまう選手も多いですが、スタンスを狭くして、“立った状態で構わない”と言いました。この状態からよくボディアッパーを打っていた彼を見た記憶があると思います。清水が重心を落としてボディを叩きに行けば、巻き込まれる可能性があるのです。それを防ぐためにこう打たせました。幸いだったのは彼がボクシングに関して真面目だったこと。高校では半年以上部活をやめてこなかった時期もありましたが、基本的には練習を休みませんでした。

アウトボクサーでもインファイターでも前進する技術は大切です。そのためのプレッシャーにはフェイントが重要になってきます。フェイントはゆっくりかける状況と、速くかける状況があります。基本的に前進するときは、相手に警戒されな

いように、ゆっくりかけるほうがいいと思っています。逆に、来て欲しくない時に警戒させるために速くかける。ところが本能的に反対のことをやってしまう選手が多いんです。フェイントは“騙し”なので、本能に逆らったことをやる必要もあるのではないのでしょうか。

僕のセオリーは“先手、カウンター、コンビネーション”の流れです。こう組み立てていくなかで自然に自分の色が出るまで、足の向きや構え以外は縛りつけません。色が出たあとに個々の技術を教えています。才能で一番だった教え子は藤岡善信です。目をケガして引退しましたが、大体のことを1週間以内で習得していました。基本的には1つの技術を“とりあえず3か月”は磨くようにと指導しています。1つの技術を3ヶ月でどんな相手にでも当てられるレベルまで高めようとする。できなければ4ヶ月目にあきらめられて他のものをやる。時間がかかるかも知れませんが、3、4年もすれば多くの技術を高い完成度でものにできているんです。

先日、清水はプロ転向を選びましたが、私も現在、プロボクシング界のトレーナーです。清水に関しては、僕の出る幕はもうないと思っています。1か月でも2ヶ月でも自分の好きなボクシングを楽しめればいいのではないのでしょうか」



## 黒岩 守 氏

ロス&ソウル五輪ライトフライ級 代表  
伊勢崎工業高校 出身

——黒岩さんは大学4年生のときにロス五輪、社会人になってからソウル五輪に出場しました。どういった練習環境で選手を続けていたのでしょうか？

「卒業後に国体の関係で鳥取に住み票を1年移して、そのあとにアシックス入社で関東に戻りました。引退後まで話しますと、8年前に退社して、地元の群馬で営業マンをしながら、ボクシングでは審判長をしています」

——いつが全盛期だったと覚えていますか。

「難しいですね。冷静さとか、技術、戦略ならソウル五輪のときがベストだったと思いますが、サラリーマンと並行しての活動でしたので、納得のいく練習はできていなかったですね。ロス五輪時代の体力と気持ちを維持できていませんでした」

——とはいえ五輪連続出場は高い安定感の証ではないでしょうか。

「日本大学での条件付きのマスやスパーで、打つ

ときのバランス強化に重点を置いて練習できたのが、その基礎になったと思います。例えば左手だけとかアッパーだけとか。後輩にいた平仲明信もロス五輪に出て、プロで世界王者（元WBA世界ジュニアウェルター級）になっていますし、レベルの高い面子だったと思います」

——黒岩さんの強さはインターハイを1度、全日本選手権を5度制していることでも確かですが、対戦相手から「実はスパーでは強くなかったのに…」という声があります。

「そうなんです。合宿中は圧倒されることがときどきありました」

——わざと手を抜いて弱点を出させていたという説もありますが？

「いやいや（笑）。それができたら、オリンピックでメダルを取っていましたよ。でも確かに試合では、体がふと軽くなる。練習のときよりもいいボクシングをできている自覚がありました」

——ロス五輪代表選考会では現在、プロボクシング協会の会長を務める大橋秀行氏も、準決勝で退けました。

「あれ、決勝じゃないから映像に残っていないんですよ。あつたら一生の宝になったよなあ。あの試合が、150戦近い私のキャリアでベストコンディションだった印象があります。出場選手で一番イヤな相手だと思っていたんですが、自分のリードがよく当たって採点にも大差がついていた。将来のプロ世界王者では、リーグ戦で玉熊幸人（レパード玉熊）にも勝っています。不得意な長身サウスポーだったのでお互いに有効打は少なかったと思いますが、攻勢が評価されて私が勝ったのかなと思いました。両選手とも、パンチが重くて勘がよかったですね」

——その後に交流は？

「大橋には初めて世界王者になった頃にアシックスのシューズを提供しました。彼から王座を奪ったリカルド・ロペス（メキシコ）にも渡したんですが、ロペスも王者時代にずっと履いてくれてね。白に赤のデザインがお気に入りだったみたいです」



—プロのジムとも交流がありましたか。

「色々に行きましたが、勤務先から近かったロッキージムではロッキー・リン（台湾出身者初のプロボクサー、世界王座挑戦者）が来た頃でしたから、お互いにいいスパーク相手になれたと思います。向こうは私のジャブがイヤだったと言っていますが、自分も4ラウンド以上やると結構もらいました。長丁場でダメージを与え合うという特性を考えると、スピードが武器でパンチの軽い私には、プロでの頂点は獲れないだろうと感じました」

—一番強かった対戦相手は誰ですか。

「海外では色々いますが、国内では瀬川正義さんですね」

—いま振り返ってオリンピックはどんな存在ですか。

「オリンピックをもっと理解して参加したかったと思いましたね。いち競技者として、知識もなく試合をして帰ってきた。それと、当時の関連品を勢いでほとんど挙げてしまったんです。それも今では後悔しています。オリンピックの壮大さに気づいていなかったんです」

—今のボクシングをどう感じますか。

「ヘッドギアがなくなってよかったと思います。自分はちょうど着用が義務付けられた頃でしたが、とにかく邪魔で仕方なかったから（笑）。今も審判として携われていることが幸せです」



※五輪のチームメイトだった荻原千春氏と

## 瀬川 正義 氏

ロス五輪フライ級代表=写真左  
宮古水産高校 出身

「幼少期から色々なスポーツをやっていましたが、何をやっても小柄なので1番になれない。そんな中で目をつけたのが、階級制のレスリングとボクシングでした。レスリングには“あまり男同士で抱きつき合うのもな”と感じて高校のボクシング部に入った記憶があります。高2のインターハイ決勝で負けて、以降、国内では負けずにボクシング・キャリアを終えました。

拓殖大学時代から社会人時代までに全日本選手権を6連覇するなかで、当時の主な国際大会にはほぼ出ました。ロス五輪では大会の銅メダリストに負けました。自分がプロに行かないと決めれば、目指す頂点は五輪になります。雑談ですが五輪では、選手村の二段ベッドが高くて下がコンクリートでしたので、寝返りをうって落ちたら死ぬと怖くなりました（笑）。それで壁にひっついて寝たのもいい思い出です。現在、日本のジムでトレーナーをしているホン・ドンシクさんとは世界ジュニア選手権とその後の国際大会でも試合をして1勝

1敗でした。

私は感覚よりも理論重視型です。“強い奴は誰とやっても、どんなルールでも強い”という意識はなく、毎試合で事前対策をするタイプでした。しかし国際大会では、例えばソ連の選手はカーテンを閉めて、構えが右か左かも隠す秘密主義に徹していた。ラウンドが少ないですからリング内で動きを調整していくのは難しいんです。アテが外れたときも大変ですね。ロス五輪のために1年間、意図的に留年をして就職後、貯金で全日本選手権を2連覇しました。7歳下の弟の設男はパンチがあるが不器用だなという印象でした。兄弟で五輪に出場できたのは日本では我々だけですが、設男と異なり、私がプロに行かなかったのは、人生60年の中で公務員になった方がいいという選択からでした。人生が30年であれば、また違う考えを持ったかもしれません。今は山梨国体のときの縁で甲府市に住み、県庁の職員です。県連の理事長も3期目になりました。

全勝のまま年齢を重ねていくと、おごりではなく、若い芽を摘みでいる感覚が芽生えていきます。下の世代にもプロに行った選手が多くいました。全日本合宿では大橋秀行ともスパーをしましたが、くっついたらその才能を発揮する反面、懐に入らせなければそれを発揮できないという印象でした。大学に進みませんでした。川島郭志さんは、世界王者になったときに上手だなと思って観ていました。戦う可能性がないわけですから深くは分析しませんでした。顔を背けてパンチをよけるなら、後頭部を狙われたらどうするんだろうとよく思っていました。

五輪に出場した選手では、黒岩守と5、6戦しています。黒岩は倒せましたが、モスクワ五輪代表だった中村司さんは倒しても起き上がってきました。8オンス時代は倒すことをイメージできたので、打ち方が違いましたね。パンチ力にも自信はありましたが、自分が優れていたとしたら第一に足の移動だと思います。ミドル級の五輪金メダルを勝ち取るという信じられないことをやった村田諒太君は逆路線です。拝むような構えだった彼は、

自分の土俵に来てくれる相手ばかりと五輪で戦いましたが、出入りの激しい選手に苦手意識があったらどうなと感じます。

キャリアの晩年は社会人選手権です。1度目はバンタム級で優勝できましたが、ここはプロボクシングジムに通っている未知の選手も多いですから、私にとっては最高に苦手分野だったと思います。いきなり振ってくると“なんだ、今のパンチは”ってビックリしました。それに動きも決してよくありませんでした。最後にもう一度だけ頑張ろうと思って、翌年の2度目は主戦場だったフライ級でエントリーしました。この時、バンタム級で優勝したのは辰吉丈一郎さんです。1度目の状態で出ていたら倒されていたかもしれませんね。彼は畳み掛ける才能がすごかったです。

教育的なメッセージを私がここで語るのは恐縮ですが、ボクシングに励んだ選手には、卒業をしても就職をしても“元ボクサーだから”という憎まれ口をたたかれない人生を歩んで頂きたい。そう思いますね」

※成松選手・森坂選手のインタビューは専門誌で掲載されたものを加筆しています。

<構成：善理俊哉>